

バウムガルテンの実体論

—「実体的なもの (substantiale)」をめぐる一考察—

津田栞里

はじめに

「実体 (substantia)」とは何かという問いは、古代ギリシャから続く哲学の歴史のなかで何度も発せられてきた。ゆえに、実体の概念史は時代の思想潮流を探る際に一つの重大な手掛かりを私たちに提供してくれる。とりわけ、いわゆる主客の転倒が生じた近代において、その事象の再考には当時の実体論の解明が必須であろう。このような理解の下に、本稿ではカント (Immanuel Kant, 1724–1804) による近代的主体概念の成立の裏側で、その直前の思想家バウムガルテン (Alexander Gottlieb Baumgarten, 1714–1762) によって準備された独自の实体定義の再考を試みる。

美学 (Aesthetica) の創始者として知られるバウムガルテンは、ライプニッツ＝ヴォルフ学派の正統な後継者、及びカント哲学の先駆者という理解の下で従来研究が進められてきた。実際に、カントが講義で使用したテキストの著者であることに着目した、カント哲学の形成史という観点からの先行研究は数多く確認される。さらに、バウムガルテン研究が最初期の段階からライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646–1716) とヴォルフ (Christian Wolff, 1679–1754) のあいだに位置づけるという方法によって進められてきたことも事実である (e. g. Casula [1979])。私たちが本稿で取り組む実体論も、バウムガルテン研究を牽引してきたカスラが「ライプニッツとヴォルフのあいだのバウムガルテン」のなかで、三者のモナドロジーと予定調和説を比較し、バウムガルテンをライプニッツとヴォルフの間に精確に位置づけるという目的の下に検討されている (cf. Casula [1979] pp. 564–565)。

その中でカスラは、アリストテレス主義的なヴォルフの実体定義に傾倒していた初版 (1739) に対して、第三版 (1750) では決定的にライプニッツ主義的な実体定義へと立場をかえた点、さらにこのことが物理影響説でも機会原因説でもなく予定調和説を採用する際の論証⁽¹⁾に活用されると主張した (cf. Casula [1979] p. 565)。この主張は、物理影響説へと進み行く時代のなかでバウムガルテンが予定調和説を一時的にであれ復興させたとする、代表的なカスラの見解と連続的なものである (cf. Casula [1975] S. 399–400, e.g. 増山 [2015] p. 19)⁽²⁾。

私たちがまた上記のカスラの見解に与するが、従来 of 先行研究がモナドロジーや予定調和説、充足理由律といったライプニッツ哲学を代表する理論を

用いてバウムガルテンを再構成していたのに対して、本稿では一次テキストに即すかたちで、彼の実体論がもつ意義を再考したい。その際に注目するのは、バウムガルテンの実体論の成立過程である。具体的には、カスラにも指摘された諸版の異同の問題であるが、私たちはとりわけ第二版序文を手掛かりに議論を進めたい。

本稿は以下の構成をとる。第一節において『形而上学』本文の検討からバウムガルテンの実体定義を紹介するとともに、第二版（1743）で行われた§. 196の書き換えを指摘する。ここから、彼が実体そのものと実体がもつ偶有性の内属の根拠を区別し、「実体化された現象（*phaenomena substantiata*）」を「実体的なもの（*substantiale*）」であるかぎり「実体」と認めたことが明らかになる。続く第二節では、彼の実体論がどのような思想に影響されて成立したのか、その成立背景を確認する。前節で書き換えを指摘した第二版における序文を検討することで、偶有性でありながらも自存するようみえるという事態が、彼の実体論の根幹に関わることがわかる。その現象的で経験に根差すかのような表現について、第三節では、「みえる」とは何か、「現象」とは何かを問おう。それによって、「実体」と「実体的なもの」という二つの視点をもつ実体論が従来とは異なる仕方で定式化可能となるはずである。

第一節 バウムガルテンの実体定義

「実体」は「偶有性（*accidens*）」の対概念であり、前者は「自存する（*subsistere*）」という仕方で、また後者は「内属する（*inhaerere*）」という仕方で、それぞれ現存する。その点で、バウムガルテンの実体論はアリストテレス以来の伝統的な理解によっている。それを裏付けるように、バウムガルテンは実体を定義する§. 191において、「実体」が「自存する存在（*ens per se subsistens*）」、「形相（*forma*）」、「完成態（*ἐντελέχεια*）」、「有性（*οὐσία*）」、「基体（*ὑπόστασις*）」、「現実態（*ἐνέργεια*）」と言い換え可能であるとしている⁽³⁾。これらの表現は、まさに哲学史上頻繁に用いられる術語であって、その点ではバウムガルテンの実体定義も伝統的なものに留まっているかのように思われる。しかし、定義そのものにはこれらの術語は用いられていない。それどころか、第二版序文からも明らかなように意識的に伝統的な術語の使用が避けられていたのである。以下では、実際のテキストの検討から彼の実体論がもつ独自性の解明を試みたい。

諸学の基礎を担う「存在論（*ontologia*）」は、存在するものについての一般的な述語を扱う学である（MT §. 4）。あらゆる述語は、「内的一般的述語（*praedicata interna universalia*）」（e.g. 「可能なもの（*possibile*）」、「存

在するもの(ens)」、「内的選言的述語 (*praedicata interna disiunctiva*) 」 (e.g. 「個と普遍」)、「関係的述語 (*praedicata relativa*) 」、以上の三種類に分類されるが、本稿で扱う「実体」は内的選言的述語に数え入れられる。また、内的選言的述語とは、二者のうち的一方のみが妥当するような対の述語 (e.g. 「明るい」と「暗い」) であり、「実体」に対しては「偶有性」が対となる。そこで、選言的述語の特性に即して、「実体」と「偶有性」の定義をともに確認することから始めよう。

§. 191⁽⁴⁾

存在するものとは、他のものの (他のもののうちで) 規定としてしか現存できないか、(そうでなくとも) 現存できるかのいずれかである (§. 10)。前者が《偶有性》であり (述語的なもの、すなわち物質的なもの、第 50 項参照、その存在するものは内在する、付帯性)、後者が《実体》(自存する存在するもの、形相、完成態、有性、基体、現実態) である。実体は、他のもののうちになくとも、他のものの規定でなくとも、現存することができる。

実体と偶有性を区別するメルクマールは、他のものの規定 (e. g. 徴標 (*nota*)、特性 (*character*)、述語 (*praedicatum*)) としてしか現存できないか否かという点にある (cf. MT[1743]S. 14)。換言すれば、実体は「自存する (*subsistere*) 」という仕方で現存し、偶有性は「内属する (*inhaerere*) 」という仕方で現存する (cf. MT §. 192)。しかしながら、この定義だけでは先に危惧したように伝統的な実体定義との明確な違いを見出すことができない。バウムガルテンの実体論の展開は、§. 193 以降に確認される。

彼は「偶有性が自存するもののようにみえる」場合があることを指摘すると、そのような偶有性を「実体化された現象」と呼んだ (cf. MT §. 193)。さらに彼は、偶有性が実体のうちでしか現存できないことを強調した上で (cf. MT §. 194–195)、偶有性を内属させるものに「実体的なもの」という名称を与えたのである。それは、偶有性を内属させることで自存するようにはみえるという、自存的現象の故である。

この耳慣れない概念の導入は、彼の実体論をどのように展開させたのであろうか。以下が、その術語を定義する §. 196 の引用である (但し下線筆者強調)。

§. 196 (第二版：1743)

実体のうちにある、偶有性が内属することのできるもの、すなわち実体は、偶有性が内属することのできる主語であるかぎりで (§. 344 参照)、《実体的なもの》と呼ばれ、偶有性は実体的なものそのとでは現存しない (§. 194)。

Id in substantia, cui inhaerere possunt accidentia, s. substantia, quatenus est subiectum (cf. §. 344) id, cui accidentia inhaerere possunt, SUBSTANTIALE vocatur, nec accidentia existunt extra substantiale (§. 194).

§. 196 (初版：1739)

実体のうちにある、偶有性が内属することのできるものは、《実体的なもの》と呼ばれ、それは偶有性の主語であり、偶有性は実体的なものそのとでは現存しない。

Id in substantia, cui inhaerere possunt, accidentia, SUBSTANTIALE vocatur, eorumquesubiectum est, nec accidentia existunt extra substantiale (§. 194) .

最初に指摘すべきは、初版と第二版以降とで上記のような書き換えが行われたという点であるが、両者の相違点に先立って共通する内容を確認したい。「実体的なもの」とは或る実体に偶有性が内属することを可能にしているまさに当のものであり、偶有性の主語、いわゆる基体と換言できる。しかしながら、単なる基体と同定しては再び伝統的な実体論へと立ち返りかねない。それを避けるように、彼は「実体」とは別に「実体的なもの」を提唱している。「実体的なもの」とは内属の根拠であり (cf. MT §. 197)、「実体」は偶有性を実体それ自体に内属することのできるかぎり「実体的なもの」となる (cf. MT §. 198)。したがって、彼は実体そのものと、実体がもつ偶有性の内属の根拠とを区別したことになる。その区別は、実体の存在と実体の機能を切り離すことで、例えば先に挙げた「実体化された現象」にも実体的なものを認めることを可能にした。

それでは、第二版の書き換え、つまり「すなわち実体は、偶有性が内属することのできる主語であるかぎりで (§. 344 参照)」という表現の挿入は何

を意味するのであろうか。当該箇所と比較から直ちに導き出されるのは、実体の存在と実体の機能をともに「実体」と呼ぶという彼の立場表明であろう。その上で、実体と見做すことが可能になるのは、「実体のうちにある、偶有性が内属することのできるもの」が「偶有性が内属することのできる主語であるかぎり」であるという条件を満たす場合であると、明示されたのである。ゆえに、この補足は彼の実体定義の補完であると見做すことが可能である。

第二節 バウムガルテン実体論の成立背景

バウムガルテンの実体定義そのものはたしかに目新しいものではないが、「実体的なもの」という概念、さらに前節で指摘した書き換えは注目に値する。というのも、その書き換えがなされた第二版の序文は次のような特色をもつからである。第二版序文は、『ライプツィヒ研究報告補遺 (*Supplementa ad acta eruditorum Lipsiensia*)』に寄稿された書評への応答として位置づけられる。その際の主要な論点の一つが、まさに「実体」の定義に他ならない。評者は、バウムガルテンの実体定義を「他のものの規定として現存しえない存在するもの (*ens illud, quod non existere potest, ut alterius determinatio*)」であると誤解していた。というのも、前節でも再三危惧されたように、彼の实体定義は伝統的な「自存するもの」という定義と容易に同一視されてしまうからである。バウムガルテンは書評に対して、実体定義の成立背景を部分的に記述することで評者の誤解を解くことを試みた。そして、これは同時に自身の実体論の詳解でもあった。

バウムガルテンの実体論は、存在としての「実体」と基体という機能としての「実体的なもの」を区別し、「実体化された現象」という事態を原理において保証した点にその特徴をもつ。その上で、先述した第二版での書き換えから確認されるように、彼は実体の存在もその機能もともに「実体」と呼ぶ。この点をすでに確認した私たちは、評者の誤解が重大な誤りであると気付くであろう。というのも、「他のものの規定として現存しえない存在するもの」のうちには、「実体的なもの」をもつ「実体化された現象」が含まれないからである。

では、このようなバウムガルテンの実体論は彼に独自の発想だったのか。答えは否である。彼は、同時代のアリストテレス研究者ソネルスを介して理解したアリストテレスの実体定義を、同時期の思想家アエピヌス (*Franz Albert Aepinus, 1673–1750*) を引用して批判していた。というのも、実体を「何らかの基体について語られるのでもなく、何らかの基体のうちに内在するのでもないもの⁽⁵⁾」、つまり「あらゆる述語の究極的な主語である」

(MT[1743]S. 15) とするアリストテレスの定義では、「あたかも従属させられたもののうちに内在するように、他のもののうちに内在する実体」を正当に否定することはできないからである (cf. MT[1743]S. 15)。その上でバウムガルテンは、アエピヌスの「それ自体によって現存する存在するもの (ens per se existens)」という実体定義を、「他のもののうちに存在するものでは決してないものであるか、あるいは、たしかに他のもののうちにあるが、他のものの部分または共有部分であるような仕方、他のものから分離されても他のものなしに分離して現存することができるようなものであるか、いずれかである⁽⁶⁾」と読みかえた (MT[1743]S. 15)⁽⁷⁾。すなわち、彼はアエピヌスの実体定義を、アリストテレスに想定されていた究極的な主語の場合だけでなく、本来は自存することができるが、現実には他のものに内在している場合も許容する定義であると解釈したのである。したがって、バウムガルテンの実体論はアエピヌスによる従来の実体定義への指摘に着想を得たものであると結論できる。

とはいえ、アエピヌスによる古典的表現を用いた実体定義をバウムガルテンがそのまま受け容れたわけではない。その表現があまりにも伝統的なものである点を考慮して、彼は自身の実体定義について次の点を指摘した。すなわち、「〈subiectum〉という語 (terminus) が障害を引き起こさないようにその語を避け、その事物 [=実体] を他のものの規定でなくとも現存することができる存在するものと表現した」点である。従来、「それ自体によって自存する」ことは基体 (subiectum) の特徴に他ならなかった。上記の指摘から、過去の実体定義及び「それ自体によって自存する」という古典的表現の従来の用法との差異化が意図的であったことが十分に窺える。

以上から、バウムガルテンが「自存するもの」という伝統的な実体定義を意識的に読みかえ、従来の乗り越えを図ったことが明らかになった。「実体化された現象」、つまり実体として自存するように「みえる (videntur)」という現象を認める視点が導入されたことで、偶有性の内属の根拠 (=「力 (vis)」) 及びその根拠をもつものを指す「実体的なもの」という概念は成立したのである。換言すれば、バウムガルテンの実体論とは、「自存」という伝統的な哲学的視点⁽⁸⁾と、「内属の根拠」すなわち「力としての実体」というライプニッツ主義的視点、これら二つの視点から構成されたものである。このようなバウムガルテンに独自の实体論がもつ意義を明らかにするために、次節では「実体化された現象」という表現に着目したい。

第三節 「みえる」とは何か

そもそも「みえる」とは何か。存在論の基本原理を扱うなかで、バウムガルテンは「みえる」と「存在する (esse)」こととを対比し、ただみえるだけでなく存在するものは「真 (verum)」であり、ただみえるだけのものは「仮象的 (apparens)」であると述べる (MT §. 12)。さらに、「存在するもの (ens)」であるようにみえているだけのものは「虚構的に存在するもの (ens fictum)」であるという (MT §. 62)。以上だけでは、「みえる」とは存在するのではないこと、いわば真ではなく仮象的であるという否定的な意味しかもたない事態であるように思われる。

ここでもう一つのキーワードであった「現象 (phaenomena)」へと検討の対象を広げよう。現象はどのように定義されるのか。彼は「宇宙論 (cosmologia)」のなかで、感官を通じて (より渾然と) 認識することが可能であるもの、つまり「観察可能なもの (observabile)」を現象と換言している (MT §. 425)⁽⁹⁾。この定義は、現象が感官による経験的認識のうちに成立するものであること意味する。換言すれば、彼の実体論の一翼を担う「実体化された現象」は、存在論のなかで定義されていながらも、感官による経験的認識をモデルとした認識論的視点の下で生じたのである。このことは、バウムガルテンの実体論が論理学に基礎をもつ存在論的視点と経験的心理学に基礎をもつ認識論的視点から構成されていることを示す⁽¹⁰⁾。

以上の見解は、これまでの研究成果と相反するものではない。従来の研究は、バウムガルテンの実体論をモノドロジーとして再構成し、それによって彼がいかにライプニッツ主義的であるのかを示すものであった。世界におけるあらゆる実体の相互作用は、「観念的影響 (influxus idealis)」と「実在的影響 (influxus realis)」とに区別される。或る実体に別の実体が影響する場合に、前者は「受動作用が受動するそのもの [= 或る実体] の能動作用である」ような影響であり、後者は「受動作用が受動するそのもの [= 或る実体] の能動作用でない」ような影響である (MT §. 212)⁽¹¹⁾。例えば、物体間の相互作用は観念的であるし、神の世界創造という作用は実在的である。このとき予定調和説を「世界の諸実体の観念的影響と神の世界への実在的影響の両立可能性を支持する立場」(増山[2015]p. 44) とするならば、実体論に関するバウムガルテンの思想変化をそれら二つの影響を可能にする存在論的基礎づけとして、すなわち予定調和説の擁護への寄与として評価することができる⁽¹²⁾。まさにこれがカスラの見解に他ならなかった (cf. Casula [1979] p. 565)⁽¹³⁾。

従来の研究は、バウムガルテンの思想史的位置付けに際して、直接的影響関係が自明であったライプニッツ (及びヴォルフ) を軸としていたのに対し

て、本稿はバウムガルテンのテキストに立ち返り、彼自身の問題意識から実体論を内在的に再検討することで新たな評価基準を獲得することができた。それは、自存するように「みえる」という事態、つまり実体であるかのようにみえる「現象」への眼差しである。他のものの規定でなくとも現存できる存在であるというバウムガルテンの実体定義は、伝統的な実体定義の乗り越えを図ったものである。アエピヌスは批判の対象としてアリストテレスを挙げていたが、本稿では紙幅の都合で扱うことができなかつたものの、バウムガルテンにとっては、デカルト主義者の神のみに相応しい実体定義⁽¹⁴⁾も、さらにはヴォルフの被造物のみに相応しい定義⁽¹⁵⁾も批判の対象であったことを忘れてはならない (cf. MT[1743]S. 17)。

結びに代えて

本稿の目的は、モノドロジーを用いた実体論の再構成や、ライプニッツやヴォルフとの比較によって、バウムガルテンを既にある思想地図の上に位置付けることではなく、むしろバウムガルテン自身の哲学体系のなかでその特徴を検討するとともに、彼の目的を明らかにすることであった。「実体」に対して「実体的なもの」を導入した彼の实体論は、「現象」への眼差しという認識論的視点の導入なくしては成立しなかつたであろう。たしかにこの主張は、「認識 (cognitio)」とは何かを問うことによって改めて精査されねばならず、彼が独自の实体論を展開した直接的理由を十分に検討することはできなかつた。しかしながら、バウムガルテンの实体論の詳解という点では、先行研究を踏また上で第一節及び第二節において一定の成果を挙げることができたであろう。以下では、現状の見通しと今後の課題を簡潔に示すことで本稿の結びとしたい。

私たちの見解はデカルトを軸とする大きな思想潮流のなかにバウムガルテンを位置付けることを可能にした。アーレントはデカルト的懐疑によって、存在と現象が分離したと理解する (cf. アーレント[1994]p. 440/[2015]p. 360)。両者の分離によって、世界と宇宙に対する人間の信頼は大きく揺らぎ、伝統的な感覚的真理 (感覚の真理) と合理的真理 (理性の真理) という対立図式は捨象された (cf. アーレント[1994]p. 437/[2015]p. 360)。このとき要求されたのが、神の存在証明を目的とする伝統的な弃神論とは異なる、人間と世界の問題とした弃神論である (cf. アーレント[1994]p. 446/[2015]p. 367)。以上のアーレントによるデカルト理解に寄せれば (cf. アーレント[1994]pp. 436-451/[2015]pp. 358-372)、アエピヌスという別の契機があつたとはいえ、バウムガルテンによって存在と現象の区別が実体論へ

と波及するという本稿の見解は、デカルト（及びライプニッツ）を（批判的に）継承した結果として一定の妥当性をもつであろう⁽¹⁶⁾。さらにここから、本稿の議論が弁神論、とりわけ創造以後の世界の持続という場面において神が被造物をどのように維持するのか、という問題へと連続していることも示唆される⁽¹⁷⁾。本稿をもとに、ヴォルフをハレ追放にまで追い込んだスピノザ主義との対決という当時のアクチュアルな問題を考察することが求められるであろう。それによって、バウムガルテンの実体論がもつ時代的な意義が解明され、彼の目的も鮮明化するはずである。

注釈

(1) これらの三説に対するバウムガルテンの評価に関しては増山[2015] pp. 41–49 を参照のこと。

(2) 当時の思想状況に関して、カスラの研究への言及はないものの、ワトキンスが同様の見解を示しており（Watkins[1995], Watkins[2015]pp. 23–100）、彼の見解もまた支持されている（e.g. 山本[2008]p. 235, 増山[2015]p. 19）。

(3) この点を鑑みるならば、『形而上学』初版に対する書評のなかでバウムガルテンの実体定義が十分に理解されていなかったことも想像に難くない。評者はバウムガルテンの実体定義を「他のものの規定として現存しえない存在（ens illud, quod non existere potest, ut alterius determinatio）」であると誤解して、彼の意図を汲み取り損ねていた。

(4) „Enns vel non potest existere, nisi ut determinatio alterius (in alio), vel potest (§. 10). Prius ACCIDENS (praedicamentale s. physicum, cf. §. 50), cuius esse est inesse, συμβεβηκος), posterius est SUBSTANTIA (ens per se subsistens, forma, έντελεχεια, ούσια, ύπποστασις, ένεργεια), quod potest existere, licet non sit in alio, licet non sit determinatio alterius“.

(5) アリストテレス『形而上学』1028b36 に該当すると言われている（MT[2011]S. 551）。訳語については出隆訳『形而上学』（『アリストテレス全集 12』所収、岩波書店、1968年）を参考にした。

(6) „substantiam dicit ens per se existens, i. e. quod vel plane non ens in alio, vel est quidem in alio, sed ita, ut sit eius pars, vel compars, utque ab eo separari, et separatim sine eo existere possit“

(7) アエピヌスからの引用には、実際の文章と若干の相違点があると、MT[2013]p. 84 及び MT[2011] S. 553 でそれぞれ指摘されている。本稿では両者の相違を検討することはしない。

(8) カスラは、前者にヴォルフのアリストテレス主義的側面を重ねた上で、「個体」に関わる箇所第三版での書き換えを論拠に挙げ、前者から後者へとバウムガルテンの思想変化を指摘した (cf. Casula [1979] p. 565)。

(9) 改めて強調する必要もないが、バウムガルテンが主に「観察する (observare)」という動詞を用いるのは「心理学 (psychologia)」においてであり、とりわけそれは感官や想像力といった下位認識能力を扱う経験的心理学においてである。

(10) この点はバウムガルテンによる形而上学の定義、すなわち「人間的認識の第一諸原理の学 (scientia primorum in humana cognitione principiorum)」という表現にも符合する (MT §. 1)。

(11) この点について、ヴォルフは次のような記述を残している。「実在的な作用関係に見える事態も形而上学的レベルから照射すれば実は観念的な作用でしかないのである (ヴォルフ『世界論』第四一、四二節)」(山本[2008]p. 234)。したがって、「実在的」と「観念的」という発想はヴォルフに由来している。

(12) 両者がバウムガルテンの予定調和説とどのように関わるのかについては、増山[2018]pp. 201–204も参照のこと。

(13) さらに増山は諸版の異同には言及していないものの、バウムガルテンの実体論をモナドロロジーの展開と解釈する。厳密には、実体と物体の対比をモナドと現象の対比として説明する (cf. 増山[2015]p. 173)。

(14) バウムガルテンは、デカルトの「第四答弁」(『省察』、A. T. VII, 226)を引用している。すなわち、実体は「他のいかなる実体の介助もなしに存在しうる」(デカルト[1993]p. 275)。

(15) 「持続的で可変的な *subiectum* は《実体》といわれる」(*Subiectum perdurable et modificabile dicitur Substantia .*) (「持続的で可変的な *subjekt* は《実体》と呼ばれる」(*Subiectum perdurable et modificabile dicitur Substantia.*)) (*Philosophia prima sive ontologia*. Reprint der 2. Aufl. Frankfurt, Leipzig 1736. Edidit et curavit Joannes École. Hildesheim 1962, § 768, S.574; H.i.O. [GW II,3]) .

(16) カントの第三類推論に関する先行研究に対しても、バウムガルテン研究の立場から、「現象的実体」という術語の成立過程を解明することに寄与するであろう。この点に関する先行研究の問題点については、増山[2015]p. 182–183を参照のこと。

(17) この点については、デカルト以来の連続創造説の受容と変容という観点を導入することが有効であろう。というのも、神が存在すること (端的

にあること)に関わるはたらきとして維持を捉えるデカルト及びライプニッツとは異なるバウムガルテンの立場に注目することができるからである (cf. MT §. 951)。

文献表

【凡例】

バウムガルテンのテキストについては、次のとおりである。原文には著者バウムガルテンによる参照指示がある。訳文では原文にない丸括弧に入れて、例えば (§. 1) のように表記した。原文では強調部分はスモール・キャピタルで綴られている。これは《 》に入れて表示した。翻訳上、補足や説明のために補訳する箇所は〔 〕で表記した。『形而上学』からの引用については、原則的に第四版を用い、その際には MT §. 1 のように表記した。他の版をもしいた場合には MT[1743] §. 1 のように表記した。

【一次文献】

- Baumgarten, Alexander Gottlieb, 1739. [MT] *Metaphysica*, editio I, Halle:Hemmerde. URL: <http://digitale.bibliothek.uni-halle.de/vd18/content/titleinfo/6859316> (accessed: 30. August 2018). (『形而上学』初版)
- , 1743. *Metaphysica*, editio II, Halle: Hemmerde. URL: <http://digitale.bibliothek.uni-halle.de/vd18/content/titleinfo/5233258> (accessed: 30. August 2018). (『形而上学』第二版)
- , 1750. *Metaphysica*, editio III, Halle: Hemmerde. URL: <http://digitale.bibliothek.uni-halle.de/vd18/content/titleinfo/5425896> (accessed: 30. August 2018). (『形而上学』第三版)
- , 1757. *Metaphysica*, editio IV, Halle: Hemmerde. URL: <http://digitale.bibliothek.uni-halle.de/vd18/content/titleinfo/5202099> (accessed: 30. August 2018). Reprint. Hildesheim: Olms, 1982. (Übers.: *Metaphysik: Historisch-kritische Ausgabe*. Günter Gawlick and Lothar Kreimendahl (übers. & hrsg.). Stuttgart-Bad: Frommann-Holzboog, 2011. Transl.: *Metaphysics: A Critical Translation with Kant's Elucidations, Selected Notes, and Related Materials*. Courtney D. Fugate and John

Hymers (tr. & ed.). London, New Delhi, New York, Sydney: Bloomsbury, 2013.) (『形而上学』第四版)

デカルト「反論と答弁」『デカルト著作集 第2巻 省察および反論と答弁』, 所雄章編, 広田昌義訳, 白水社, 1993年.

アーレント『人間の条件』志水速雄訳, 筑摩書房, 1994年.

——『活動的生』森一郎訳, みすず書房, 2015年.

【二次文献】

Casula, Mario, 1975. Die Lehre von der prästabilierten Harmonie in ihrer Entwicklung von Leibniz bis A. G. Baumgarten, *Akten des II. Internationalen Leibniz-Kongresses, Hannover, 17–22. Juli, 1972*, Bd. 3, Wiesbaden: Steiner Verlag, S. 397–415.

——, 1979. A. G. Baumgarten entre G. W. Leibniz et Chr. Wolff, *Archives de Philosophie*, 42, pp. 547–574.

Watkins, Eric, 1995. The Development of Physical Influx in Early Eighteenth-Century Germany: Gottsched, Knutzen, and Crusius, *The Review of Metaphysics*, 49, pp. 295–339.

——, 2005. *Kant and the Metaphysics of Causality*, Cambridge: Cambridge University Press.

増山浩人『カントの世界論 バウムガルテンとヒュームに対する応答』北海道大学出版会, 2015年.

——「カントのライプニッツ哲学受容の源泉としてのバウムガルテンの『形而上学』—前批判期カントの予定調和説批判—」, 『ライプニッツ研究』第5号, 日本ライプニッツ協会, 2018年.

山本道雄『カントとその時代—ドイツ啓蒙思想の一潮流—』晃洋書房, 2008年.